

二つの明治新派俳句集

——新俳句類選と新俳句帳——

明治三十五年、子規まず去り、同三十六年紅葉歿して、明治時代の新俳句運動の第一期が終った。次期の俳人たちの歩みは、しばらくは子規の日本派、紅葉の秋声会派を受け継ぐものであった。そういう歩みの中から、自分らの俳集団を代表する句集を編もうとする考えの生じて来るのも当然であつた。ここに、いささか調査して見ようとする俳句集は、いずれも秋声会派に属するものである。しかも二集とも、今日に至っても、それほど注目されていず、殆ど忘却されてしまった。私があえて筆を執るのも、こういう句集があつたということを世の俳人、及び俳句研究家に知って貰いたいためである。明治書院の「俳諧大辞典」にも、この二つは採り上げられなかつた。採り上げる程の価値がないからであろうか。私としては芸術としての価値の問題にとやかく、かかわりたくない。今はただ、俳人たちの努力の結集である二つの句集が、ここにかく残されているという話を語りただけである。これらの句集は一派を代表する句集として、決して無視できないものと私は考えている。句集の価値

二つの明治新派俳句集

松 岡 満 夫

について、とやかくいうより、こういう句集が出版されたことを書き残したい理由も、そこにある。以上の前書をつけて、さて、はじめに取りあげたい句集は

「新俳句類選」である。

「新俳句」という名称は、日本派の最初の類題句集の書名に用いられている。子規の死後、今さらこの名称を用いるまでもない事と思われるが、旧派に対する新派の優越意識はまだ失せていなかったのである。それは、この句集について述べようと思う「新俳句帳」が同じ名称を用いていることをもって見ても、如何に根強いものであつたかを知るであろう。「新俳句類選」は岡野知十、大島宝水（貞吉）編である。明治三十九年七月二十五日、読売新聞社発行、形は、明治時代に行われた袖珍本型で、一冊完本である。巻頭に明石の海辺の水彩画（筆者、光太郎）を挿し入れ、少しばかり色を添えている。序文は戸川残花が寄せ、集末に付録として岡野知十の俳話一束を載せている。

さて、この書の凡例によると「本集は明治三十四年より明治三十九年に至る読売新聞所載の俳句中より更に我意の適くところに従ひ選び収めたるものなり」とあり、読売新聞だけの材料を採ったことになっている。新聞が俳句発表の重要機関であったことは、子規が日本新聞に拠って俳句革新の活動をはじめ、この派を日本派と呼ぶようになったこともあって、当時の俳壇の特色であった。今日の雑誌を中心とするのとは異なっていたようである。勿論、俳句雑誌も秋の声、ホトトギス、俳藪、文藪、俳声と相ついで出て、知十も半面という機関誌を持ったのであるから、宝水が自派の句を集めるのに、あながち読売新聞による必要もなかったはずである。それなのに、読売によるとあえてことわったのは、新聞俳句がまだ世に重んぜられ、編者にしても有力新聞に拠ることを名としていたからであろう。

それにしても、明治三十四年には尾崎紅葉はまだ読売新聞をやめていない。三十五年夏、やめたのである。俳声第一巻第二号（三十四年三月二十日刊）に新聞俳壇略評という一文あり、それには

読売 尾崎紅葉、角田竹冷氏

日本 根岸派

毎日 伊藤松宇、森無黄氏

二六 二六吟社

国民 高浜虚子氏

以下略

とある。知十は、はじめ毎日新聞に拠って俳壇評に鋭鋒を見せていたが、三十四年以前すでに毎日を去っていたと見える。この記載の毎日派の中

に彼の名があげてない。三十四年八月には彼の機関誌「半面」が創刊された。三十六年一月、「卯杖」第一号によると、新聞上の新年俳壇の状況が詳しく報導されている。その中の一部分をあげて見よう。

読売 知十

日本 碧梧桐

毎日 松宇、無黄

国民 左衛門

朝日 竹冷、永機、雀志

人民 秋声会

中央 秋声会

秋声会が六新聞、日本派が一新聞と統計してあるが、確かに、新聞俳壇では子規系より秋声会派が勢力を持っていた。秋声会派と言っても、この派の俳人は一人一党的な所が強い。「卯杖」の読売俳評には「先き頃紅葉君に更はりたる知十君が此俳壇に尽すところ尠ならず、従つて其調の一変したるを見る、新年句は矢張子が選評にして」として、次の天地人三句をあげている

天 七草の緑濃緑うちにけり 天抄

地 旗雲や日は海の上に春の国 伏也

人 花を引く巡査の妻や松の内 清蹊

これに対する「卯杖」記者の評は「何れも半面派の句調をそなへたり」であった。それにしても宝水が知十派の句集を編むに読売新聞だけによると言ったのはどういふわけであろう。思うに俳壇は雑誌よりも、まだまだ新聞の上に重きをおいていたからであろう。この句集の発行所が読売新

聞社であったのも、読売の愛読者のうち、俳句を好む者に売らんがためであつたらう。売名と商策とを兼ねた著作というのは言い過ぎであらうか。知十は秋声会にも属していたが、一人一党的色彩の最も濃い人で、俳壇にあつても比較的公平な立場にあつた。三十三年十一月に自分を慕い寄る人々と「雀会」なるものを組織した。「江戸座の俳趣味に就きて」(四十二年)という宝水兄宛の書簡体文中に彼はかく書いています。

宝水兄、十年以前に筑地の陋居に、聾耳、木居等とただ慾も得もなく俳句研究したが、一体あれは何であつたらう。面白かつたのであらうか、儲けたいためであつたらうか、十七字の小文学で名と利を求めようとはいくらしも思ひつかぬとすれば果して何のためであつたらう。而もこれを以て朱門の酒臭にあづからうとする精間の修行でなかつた事はいふ迄もない

名も利も求めていないという。一人一党の人、秋声会派の人はよくこういう。風雅のためとか言いたいのであらうが、全く名のためにあらずというは強弁であらう。ここに十年前というのは明治三十三年に当ると見られる。それは、「半面」第五号(三十四年十二月)に知十が、

明治三十三年十一月中に築地近傍にある俳家の二三、相会して月並の巻及び運坐を立てたのが二年余(一年余か)の今日まで継続し、会員としての名簿を点検すれば前後百廿六人に上つて「雀語集」第四まで発行し、「半面」刊行後之を廃刊した。(中略)それこれ協議の末、雀会は三十四年十二月除夜を限りに解散す。

と記しているのわかる。「雀会」の名称は「俳声」によれば木居の庵号を雀庵というによるらしい。知十が月庵で、両人の庵宅にしばしば会

合したが、趣味による単なる会合ではなく俳壇に一旗あげようとするものであつた。「雀語集」は未見、俳誌「半面」も断片的に覗いただけで彼の行動をとやかくいう資格はないのであるが、「半面」の責任編集者は宝水であり、知十のもとに宝水、木居、白雨、龍耳らが集つて俳壇に新し味を打ち出そうとしたのである。「新俳句類選」が材を読売俳壇に限定しなかつたら、更に時代をよりよく代表し得たのではなかつたか。

「半面」に拠る人々は、自派を新々派と言つた。「半面」誌上に明白

に

曰く、専ら史的研究に従ふ

曰く、新派の俳調を鼓吹す。半面の期するところは是なり。とその主張をうたつてゐる。史的研究に従うということは、当時の俳壇の一般的傾向で、半面社中の独占とはいわれぬ。明治俳句の子規らが蕪村調復活による所の多かつたのも、その一つのあらわれである。学究的研究にのみ終始すれば、俳壇への直接的实际的影響を期待し得なくなる恐れがあるが、俳諧の長い歴史を考えれば、史的研究をおろそかにしてよいわけがなく、日本派も秋声会派もその運動の根基は史的研究であり、子規の俳句分類、酒竹の俳書蒐集、竹冷の五元集研究、等々我々はそれらを見捨て得ない。紅葉にも古俳句を編輯した著作があつた。明治三十三年頃は特にこの傾向が強くなつてゐたと思う。日本派の史的評価が蕪村時代から芭蕉時代に移り、路通、惟然の句集を俳諧叢書の一巻として出版しようといふことが知られてゐる。(ホト、ギス四巻二号、消息欄、碧梧桐記)

知十は特に其角に執心であつた。彼の其角研究「管其角」が文芸叢書

の第一編として出版されたのが三十三年（三月二十六日、豪華房発行）である。この書の表紙絵は其角の点印半面美人に因んで居り、雑誌「半面」の名もそれに基き、更にこの雑誌の表紙にも半面美人が画かれて居た。知十がどうしてかくまで其角を愛するか、その理由は「晋其角」一冊の中に十分に書きしるされている。彼は其角の特色として次の四項目を数えあげている。即ち、

- 一、所謂俳家に行はるゝ行脚家にはあらざりし
- 二、自然をうたふ俳客にあらず
- 三、俳徒を天下に得て、之れを指導し勢力を張らんとす如き俳客にあらず
- 四、その好むところは人事に傾き、随てその喜ぶところは、都会にあ

り

彼の半面派の目ざす所も、亦ここにあったのであろう。しかもそれは、日本派が目ざして来た所とはことなり、明かに日本派に対抗する主張であったと思う。この中、都会的であることが、彼の特に念願する所であった。竹冷も其角をもち上げ、五元集についてはこと更に愛着を抱き、註解の如きを試みたが、知十程に徹底した崇拜ではなかつたようだ。竹冷の最後の目標は芭蕉であつたらしい。彼の主唱によつて「芭蕉句集講義」（明治四十一年—大正四年）の編まれた所以である。「晋其角」の文芸叢書は知十、一人の手によつて十二巻ほど出される予定であつた。実際に予定通り出版されたかどうか知らない。俳人、画人、文人の名を予定目録の中に見るが、俳人の中に芭蕉はえらび出されていない。其角の他には、蕪村と凌俗があり、今一人、雨華庵抱一があつた。抱一伝は「晋

其角」に次いで第二巻として公にした。抱一は酒井家の御曹司であり、大名の一族として朝夕の不自由もなくあらゆる芸道に遊んだ人、俳諧はその余技であり、その生活様式は全く都会的の代表である。知十の主張から見て、或は其角以上に共鳴し得る人物であつたらう。江戸座俳諧の小手先の器用に墮ちた俳諧趣味は嫌うたが、その仲間にあつて、閑雅風流の致を失わず、一点のイヤミなき抱一の行き方には心から敬意をあらわした。知十自身も明治の俳壇にあつて悠々として自己の風流に徹し、イヤミのない境地にありたかつたのだ。「晋其角」「雨華庵抱一」とも、ただの伝記を書くのが目的でなく自分の理想を托するのが目的であつた。

「元禄の晋其角を借りて、明治の俳壇を説き、『日本派』と『秋声会派』の態度を論じ、墨沫の飛んで俳界の当今問題に触れざるはなし、読む人あるひはこれは晋其角にあらず、『俳諧風聞記』と『俳諧露骨録』との餘墨なりとせむ」という。彼くらい当代俳壇のあり方を気にする俳家はな。研究報告にしる、趣味随筆にしる、筆のあまりは必ず俳壇に警告を発する。「私の俳諧はほんのただ自分だけの楽しみです」という考えは、はじめから終わりまで一貫している。抱一流の考え方であらうか。

「半面」は、はじめは毎月一回の出版であつた。当時の広告によれば「毎月一回（一日）発行、定価一冊金十銭（郵税五厘）東京市神田区西紅梅町十二番地、発行所、半面社」などとある。けれども後には次第に月を隔てるようになったらしい。売行きが悪くなったのであらうか。つまり知十らに共鳴する人が少なくなつたためであらうか。三十四年八月創刊から三十六年一月までに十三号ほどが出され、その二月に二巻第一号が出された。三十八年五月に停刊になつたという。三十六年一月の「卯

杖」創刊号の「半面」広告文に

趣味の清新と帰向の統一を以て呼応し、敢て多数の同志を求めざるに
会員簿に登るの同人三百余人、同主張の下に一途向上に余念あるなし。
半面はこの同志研究の俳壇にして新声鼓吹の詩園なり。又「読売新
聞」俳壇は半面と相並びて同志が日々の吟場なり。投句者常に五千人
に出入す

とある。広告文の宣伝とはいえ、「半面」の姿を知ることができよう。

「半面」と読売新聞とは一つの盾の両面である。宝水の「新俳句類選」
は知十派のかかる模様の中で編まれている。作者数も六一九名にのぼり、
これまでの新派俳句集では最も多い。「卯杖」一卷第四号に、俳句雑誌
の売上高のことが書いてある。

ホトトギス 二五〇〇

卯杖 二三〇〇

半面 六〇〇

「卯杖」「ホトトギス」両誌に比べて、「半面」の売上数はあまりにも
少い。それでも、その数が「新俳句類選」の作者数とほぼ同数であるこ
とは不思議である。消息によると「読売新聞」の俳句欄への投句者数は
時には五千人にも上ったと伝えられている。「類選」が材料を、「半面」
にとらずに新聞の俳句欄に求めた理由もわかるうというものである。

「半面」誌は一旦停刊したが、しばらくして復活し(四十一年六月)、し
かもそれが忽ち発売禁止となって、やむなく「半面」を改めて「新半
面」として出すなど転変が烈しかった。主筆知十の俳風が比較のおとな
しいに拘わらず、かかる移り変りがあったということを見ると「半

面」も文壇の烈しい動きに応じようとする、すこしばかりの野心もあつ
て思わずつまづいたと見られる。知十の心底も俳壇を批判するものを、
風聞記以来常にひそめていて、それが「半面」の編集方針にかなりいち
じるしくあらわれていた。「卯杖」六卷十号(四一、一〇、五)に
半面、復活せる会誌も又政府の忌諱に触れ、発売禁止の厄に遭へるが、
此程新半面と号して再び世に出でたり

とあるが如くで、その「新半面」の表紙には「あらゆる古き思想と形式
とを捨てて、最も時代思潮に交渉深き新文芸を創建せんとするもの、こ
れ我等が懐抱なり」と印刷してあった。俳句雑誌でありながら、小説あ
り、詩あり、短歌ありで、文芸界への野心は「ホトトギス」や「卯杖」
以上であったと見られよう。短歌においても、口語短歌にまで手をさし
のべている。口語短歌といわず、現語短歌などと言っていたが、西出朝
風の

浅草の観音の夜の春雨に五年の恋の暮はひかれた

華やかな仲店の戸はしめられた五年の恋は一步はなれた

という一片をあげておけば、その大体がわかるであろう。何はあれ、新
しさを求めることが「半面」の歩みであったのだ。「新俳句類選」は新
聞俳句欄が材料であっただけに、きわだって新しさを求めたわけではな
かるうが、それにも拘わらず新しさを欲している編者たちの心はうかが
いとられる。その点を句について考えて見よう。

自転車に春風孕む羽織かな 宝水

奏果て、夜や春寒しオペラの灯 白雨

永き日やコンパス磨く製図室 蒲水

行水のシャボン置きけり石の上 江南

纜にビール冷すや舟遊び 小羊子

乗馴れぬガタクリ馬車や秋の雨 里城

素材が新しければ句も新しいというのではないだろうが、かかる句を多く採っていることが、彼らの新し味の一面を知らせている。都会的といふことが、こういう句にあるとは思われない。知十の

子規雨の櫂の五月場所

流行は三つ紋小さく更衣

軽口の船頭酔はせ舟遊び

など、もし強いて言えば都会的な句と言い得るだろう。ことに、更衣・舟遊びの句の趣には何となく其角風があり、其角を崇拜していた知十の詠み口と思われ、又、知十をはじめ半面派の人々が心を寄せていた江戸座の句風の行き方とも思われるのである。しかし「類選」にはかかる趣の句はそれほど多くない。

更衣されば我句の清新に 松城

「半面」の理想を詠んだ句である。知十も

紅梅や我家の句は濃艶に

と詠んでいる。両句とも句としてすぐれているとは思われない。しかし、とにかく彼らは清新に、また濃艶にあらうと努力した。紅梅の句が知十の自讃の句であることは、「卯杖」三卷一号（明治三十八年）から連載された明治三十八句撰（斎藤松洲画）にも此の句を入れておくこととわかる。濃艶の句とはどういう句か、「類選」中にさぐれば次の如きものかと思

秋蝶や萩に抛つねり扇 柳波

虫なくや文宮を解けば光る玉 龍耳

初雁や傘ひらく酔心地 颯々

船宿に雁きく宵や小搔卷 白菊女

思い切った濃艶さでなく、薄化粧の中に自然と浮び出る濃艶さで線が細い。その点は日本派の蕪村を模倣して蕪村の域に至り得なかった擬蕪村調に似た所がある。少くとも「類選」に於いて見る所では半面派は、日本派より一步すら前進していなかったと思う。ここにあげたような句をむやみに並べられては逆に興味がそがれる。むしろ「類選」の句風の一般的なものは、写生趣味を詠んだものである。清新なる句というのは、あるいはこういう句風のことを指すのであろうか。次に、冬の部から枯蓮の句を抽出して、本句集における写生趣味を示して見よう。

蓮枯れて曙寒し水の村 柳波

蓮枯れて水枯れて池の西日かな 西城

枯蓮に小さき鳥のとまりけり むつ子

蓮枯れて夕風寒し池の雨 縫女

枯蓮や石橋た、く玉霰 木居

枯蓮の風に乱れし夕日かな 宝水

可もなく、不可もなく、従って厚みも深みも、さてまた感覚的鋭さもない平凡なものになっている。清新なる句というのはこういう句をいうのであろうか。日本派の最初の句集である「新俳句」の句風から何歩も前進していないのがもの足らない。「新俳句」の枯蓮の句を次に載せておこう。比較して見られたい。

枯蓮に鳴近う見えて水浅み

碧梧桐

枯蓮の間に鳴が浮いて居る

其村

蓮十里尽く枯れてしまひけり

子規

「新俳句類選」の作者数は六一九名、これまでの新派俳句集と比較するに、数において本句集が最も多い。総句数二一〇九句、書の形は袖珍本であったが、量の上から見れば、「新俳句」や「春夏秋冬」に肩を並べている。闕者知十の句が二〇三句、編者宝水の句が一三四句で、他を圧している。掲載句数の多い順に二、三あげると、龍耳の七七句、千雅女の五四句、時尓の四六句、江南の四一句、里城の二九句、木居の二三句、となる。千雅女は三具氏（明治四一年歿）宝水の義姉であり、凡例によると本句集編集に当りその労を煩わした人々の中の一人である。本句集には知十の他に有名人を見ない。愛桜の句も八句ばかり見えるが、愛桜時代の井泉水であろうか。戸川残華も当時の有名人であったが、句はわづかに三句である。ただ注意されるのは残華が序文を書いたことである。「卯杖」一巻二号（明治三十六年二月）に「大宗匠の資格」と題する一文がある。その一節を見る。

しかし新派の先生も考へものです。遊の一字が子供の遊なら世話はありませんが、翁が遊んだ遊となると理想的超然的哲學的詩的と的が大分に多くなる。子規さんのやうに境遇が境遇だと、一方からはむしろ順便の所もありますが、諸君のやうに大臣、社長、頭取、学者、議員、記者と紳士録で驚かせる位置を望むと、三昧は大分困難だ。英国でもテニソン以後は大詩人が出ぬと云ふ評判じや。大連湾からモスコ府まで旬日に汽車で走れた所が、詩神の宮殿は容易には到着されぬ。

本句集の序に於いて残華の述べる所、ほとんどこれと同じ考えである。俳人は廃人に通ずると今までは考えていたがそうではない。むしろ俳は盃に通じ、一杯の美酒に陶然としてバックラス神と舞踏するミュージックの妙音を聞く、いわば詩仙の別名である、ということを気取って書いている。残華の考え方は新しいやうで古く、古いやうで新しい、奇妙な感じのするものである。そこが半面派の句風に何となく通うている。残華に序文を乞うたのも感情的に一致するものがあつたからであらうと思われる。付録の「如何にして句を作るべき乎」で知十は、句作方法として

一、作法に拘はるな

二、古人の句を読むな

三、師匠を持つな

の三勿主義を説いた。これだけから見れば一切の伝統を破って行く所に新しみが得られるというやうである。「法式を破り、古句を破り、師友の選を破り、其以外に自家の作境を求めることである」というのである。そのくせ、彼は俳諧学にかたり深入りして居り、何かの時その知識がはたらきかけて、容易に伝統を破り得なかつたと見られる。彼も新しいやうで古かつたのではなからうか。

「新俳句帳」

「新俳句帳」は、秋声会の機関誌として「柳杖」が明治三十六年一月に発行されてから、停刊にもならずによく三年余も永続し来た、それを記念すべく、また此の派の三十六年以後の俳風を示すべく、主体を「卯杖」の投句にとって編集されたものである。「俳諧新潮」以後の秋声会派の代表句集として必ず記憶しておかねばならぬものであらう。句集と

してのよしあしは別として「俳諧大辞典」(明治書院)にも取りあげられなかったのは何故だろう。「新俳句類選」と同じ運命をたどるのが気の毒さに強いて解説して見ようと思う。

「新俳句帳」は牧野望東、文屋菱花共編で、春、夏、秋、冬、新年雑部の五巻となっているが、五巻の中、冬と新年雑部の二巻は未見である。あるいはついに出版できなかったのであろうか。書型は袖珍別型で、一冊毎に表紙の色どり、絵模様をかえて季節感にふさわしくし、巻尾に白紙の部分数十枚入れて句作者の備忘用の便に供し、なかなか凝ったものである。発行所は秋声会出版部となっている。春之部が明治三十九年五月五日発行、夏之部が同じく八月十日、秋之部が同じく九月二十九日となっている。それから二年後の「卯杖」六巻十号(四十一年十月)に次の如き記事が見える。

一、装釘意匠瀟洒にして斬新、明治俳句中の一異彩たる事、各新聞雑誌の批評に依て最早知了せらるゝ、処なるべし

一、本書運座用として携帯頗る便利なる新形袖珍の美本にして巻尾に各自の句留備忘録等の用に供すべく適當なる用紙を添ふ

一、編中の集句は全国各地同人の句集中より其粹を選びたるものにて大凡二百題一千句新題珍題亦尠からず

冬の部編纂に付拡く俳句を募る(新俳句帳原藁と表記ありたし)

かくの如き広告記事があつたが、冬之部は出版されなかつたようである。無論、新年雑之部も出されなかつた。この頃の「ホトトギス」の新刊紹介の記事を調査して見たが発見できなかった。春、夏、秋の三巻はすでに紹介されているから、残りの巻も出版せられさえすれば紹介したこと

であろう。何故に出版せられなかつたか。原稿に入れられるべき句は、三十六年以來の「卯杖」誌上から集めれば十分集め得られ、それに同人たちが多少補足すればよかつた。春、夏、秋の各巻のはじめに「新俳句帳は重に明治三十八年以前に於ける我が同人の作に係り、其材料は雜誌卯杖並に各家よりの寄稿のみに依る」とあるが如き編集方法であつたので、少くとも冬之部位はなし得たはずである。せめて春、夏、秋、冬四巻にして完結としておいてくれたらよかつたと思う。上の広告記事で見れば足かけ三年がかりで冬之部刊行の手筈となつて、さて新しく句を募集して見たものの、流行変化のために、既刊の部とギャップの生ずる可能性があつて、それで躊躇したのであらうか。また編者の一人、望東は病弱で句集編集につとめることができなくなつたのであらうか。「新俳句帳」は「卯杖」の句風を代表するものである。その「卯杖」の編集を望東が辞退し、文屋菱花が後を継ぐ。やがて菱花も手を引き妻人が世話をする。もし詳しくいうと、「卯杖」ははじめ秋声会出版部を設けて発行所とし、その住所は東京市京橋区南鍋町二丁目三番地となっている。その時編輯人である望東の住所は下谷区上野花園町十八番地である。望東は後に神田区仲猿楽町一番地に移り、出版部もそこに移した。やがて大東社が発行所となり、望東は編集を辞退すると共にそこを退社した。「卯杖」五巻五号(四十年五月)から大東社が発行所でなくなり、文屋菱花が菱花書房を作つて、そこを秋声会の本部とした。その時の住所は神田区仲猿楽町十七番地となっている。六巻二号(明治四十一年二月)から牛込区矢来町三十五番地に移転、六巻六号ではまた牛込区赤城下町四十七番地にかわつてゐる。六巻十二号から小石川区西江戸川町廿番地となり、七巻

四号（四十二年四月）で改題して「木太刀」となり、編輯人は篠山吟葉、発行所は麴町区元園町一丁目四十四番地、木太刀社である。しかもその後間もなく木太刀社は牛込区築地町十二番地に移った。星野麦人の住所であったと思う。十二巻十号（大正三年十月）から麦人編輯となるのである。転々として定まらず、「新俳句帳」が未完になってしまったのも秋声会のかくの如き動搖によるものであったろうか。いずれにしても完成し得なかったのは残念である。今後俳句史の上から抹殺される恐れなしとしない。竹冷を中心とする秋声会派の類題句集で、従って自派の人々の句を最も多くとっていることは勿論であるが、紅葉、小波、鏡花、風葉、秋声らの有名人の句も入れており、その点だけでも興味深いものがある。例えば、所載の鏡花の句が、わずかに七句ではあるものの、鏡花全集（昭和十七年岩波版第二十七巻）の俳句集に見られず、全集の編者が「新俳句帳」に気付かなかつたのであろうかと不思議に思う。その鏡花の句をあげておく。

いで立つや根来の塔の蟻法師

心太唇鳴らす微風あり

お物見にいでます日なり田植唄

打水に自転車鈴を鳴らしたる

花一つ紫陽青き月夜哉

撫子に雨降りそぐ河原哉

中庭や秋海棠に日の疎き

紅葉の句にしても紅葉句帖（明治四十年刊）に見えないものがあつたりする。この紅葉句帖は逸句が多く不完全ではあるが、前年に出版された

「新俳句帳」を何故参考にしなかつたか、これも不思議に思われるのである。紅葉は秋声会派の重鎮であつたが、「卯杖」創刊の年の十月三十日に死去しているので、「新俳句帳」ではわずかに十八句しか入れられていない。また、その句は「卯杖」だけから求めたものでもなかつた。故人と現役とでは入句数に差をつけられるのは当然であろう。竹冷の八九句、望東の六〇句、麦人の五二句、塵山の四四句、松宇の四二句、活東の四〇句が、句数の上位に属する人々である。「俳諧新潮」で紅葉が目をかけていた霞山の句が一四句とられている。やや命脈を保っているという有様である。最も多く句を載せている竹冷が重んぜられたのは彼の社会的地位によると見るべきであろう。竹冷は明治三十六年代議士に当選しており、祝賀俳筵のことは「卯杖」四号に見える。次に「新俳句帳」における彼の句を抽出して見る。

忍び給ふ鼻赤の君や春寒う

藪入の胡座をかいて見たる哉

手拭の赤い汐干の女房かな

暖簾やちよと首出せば風薫る

夏の海松原越に見ゆるなり

陽や君に馴るてふ一夜鮮

馬買うて市を出たれば秋の雨

鯛や松にかゝりし蔦かつら

黄菊這うて白菊這うて背戸の秋

古俳句研究にわざわざいされて小さくまとまり感覚のひらめきの乏しい句風となっている。知十が「古人の句を読むな」といませめたのも句にの

びがなくなると見たからであろう。さればと言って本句集にのせられた知十の句（六句）もとより斬新という程のものではない。

無花果の広葉に雨や夏近し

半襟の浅黄鹿の子や夏近し

「新俳句類選」の知十の句

水欄に背おしむけて夏近し

と相似ていること、知十の句風がこの程度であったことを知る。この程度が当時の秋声会派の好みで、要するに穩健であろうとした。それにしても鳴雪、露石の如きホトトギス派の名を見、また桜魄子、柿山伏ら進歩的ホトトギス派の俳人の名も見、愛桜の井泉水も一四句ほど入れてある。俳壇の人間関係をこの句集によって知ることができるのである。清人である蘇山人の句もとられている。彼は「卯杖」創刊の前年に死去している。材料を主として「卯杖」に求めたとはいえ、かくそれ以前の故人の句もせているのである。蘇山人の

川狩の夕日まばゆうなりに梟

は「俳諧新潮」にも見える。また鷗外の名が春之部に見えるが、これは森鷗外ではあるまい。あるいは鷗州の誤ではあるまいか、その

摘草の風呂敷ふるふ流れかな

は鷗外全集に見当らない。

そもそも「新俳句帳」の句風が新奇を求めず温和であることは、例えば隴の句の中に、「卯杖」三号所載の紅葉の句、

泣いて行くエルテルに会ふ隴哉

の如きがとられていないことでもわかうというものである。これをの

せなければならぬというのではないが、材料として眼前にあるこれを省いたということは注意しておいてよからう。本句集をながめつつ「卯杖」誌上の句と比較して見ると類句の多いのに驚かされる。類句が多いことは短詩型のさだめではあるが、そのためにかえって類句を拾うことよって句風の傾向をうかがうこともできる。次にすこしあげておく

春の夜の枕時計に更けにけり 望東

（春の夜の喫煙室に更にけり 無黄―三号）

夕霞島根に赤き灯かな 折亭

（夕霞早灯の見ゆる島根かな 至青―四号）

鯛網に浜は餘寒のかがりかな 青瓢

（筏組む餘寒の川の篝かな 梅醉―三卷四号）

鶯や旭さし入る竹林 活東

（鶯や碓氷の溪に竹林 活東―五号）

ぼこくの三味弾く入梅の裏家哉 風香

（ボコくの三味鳴る梅雨の裏屋哉 折亭―三卷七号）

はつたひにむせかへりたる涙哉 小笈

（夢にむせびて俳を論じけり 藤紫白―三卷六号）

青鷺の背に夕雨のかゝる哉 至青

（青鷺の背にさすや小田の月 至青―八号）

葉桜に夕月赤き堤かな 喜風

（葉桜に夕月人なき堤哉 折亭―三卷五号）

同一人の類句は改作であろうか、しかし異なる人のあまりにもよく似た句は何と見るべきか、もう少し選を厳重にすべきであったと思われる。

敵選の不十分であると同時に一方では句の作られた事情を前書でもつけて明かにしておいてもらいたかったものも見える。例えば

浦淋し鶴引くあとの雨一日 松宇

宇佐の宮その神松を引くや鶴 小波

は「卯杖」二号に見え、春季の鳥にて頭にうの字を載く句として作られたものである。事情を知って作者の手腕のわかる句である。また紅葉の騒読んで端午を酔へる儒生哉

は、「卯杖」八号の霞峰子出獄紀念帖の中の句である。出獄紀念という前書がないと、この句の趣味は理解できない。

句集というものは、その性質上あまりに新奇なものは求めにくい。従って本句集の如く句風の微温的になるのはやむを得ない。しかしそれ過度が過ぎると平凡になってとりえがなくなる。

秋晴や峠の茶屋の遠眼鏡 西男

まことに平淡な句であるが平淡の中に味のあるという句でもない。これは「卯杖」九号の「ひともし頃秋雑吟」の中からとられた句である。この秋雑吟の中からは、この他に

馬蓼のすぐれて高し草の中 南岳

木の蔭にすれば風ある残暑哉 苔花

紅に露の宿りや美人蕉 霽人

ガラス戸の曇り侘しや秋の雨 望東

の四句、すなわち都合五句がとられている。雑吟の総合数は五十五句であった。十分の一選であるが、選ばれたものは調子の静かさだけで訴える所のほとんどない句ばかりである。

木枕の我家なりやこそ秋の夜の 四丁

居残りて大きなかほの藪蚊哉 翠華

物音やあたりを払ふ蜻蛉の眼 麦人

五十五句の中、すこし変つていられると思われる句を抽いて見たが、この句集ではかかる句はできるだけ敬遠している。同じ「卯杖」九号の「ひともし頃席上吟」十七句の中からは次の四句がえらばれている。

遊子一夜砧に韻を探りけり 小波

月の芒暫くあつて戦ぎけり 松宇

霧晴れや大宮口の大鳥居 松宇

蛸や松にかゝりし蔦かつら 竹冷

逡巡として三十年代当初のあたりを彼らは徘徊していたのではないかと錯覚する。句風のむやみに変化するのが進歩とはいわれないが、いつまでも古典的、回古的ではどうにもならない。

「卯杖」一号に竹冷談話がのせてある。芭蕉、其角、蕪村を考えつつ俳諧の史的研究の必要を説いている。彼にとっては三俳人の上に軽重はないが、明治時代の蕪村流行にはあき足らず感じている。結局、元禄へ帰えれという心持である。ただそれだけであつて、どうすれば元禄に帰えれるかは説かない。むずかしい問題である。「古人の句を読むな」というだけでも解決されない問題である。竹冷は流派を否定する

俳諧には決して流派などというものはありません。強ていへば千人千派百人百流となります。正風系といへば其中には其角嵐雪支考もあれば蕪村もあれば一茶もあれば又蒼虬もあるではありませんか

知十は「師匠を持つな」と言っている。俳人達がとかく流派をなしがち

であることへの警告であらうが、彼らの力くらいでは俳諧そのものに内在する力をどうすることもできない。

私は流派とは云ひません。作句の上には高調とか卑調とかいふもの、區別を得心すべき事と存じます

高調であれ、卑調であれ、同趣味のものがそれぞれ各の調の下に集団を作るのが俳諧の定めである。「卯杖」二号に楽天居（小波）はかくいう。

俳諧は文学に非ず。寧ろ文学遊戯なり。高の知れた十と七文学、それに宇余りがあつたとしても所詮三十七字とは成るまいじやないか。それで真の文学的の権能が何として尽されやうぞ。又聯句即ち俳諧なるものとても、元々一句々に別様の意味を現はしたもので、五十韻百韻と云つた所が畢竟意味上の尻取文句に過ぎない。よし其間に森羅万象を詠じ得た所が、一卷として何の意義があらう。が若し之を遊戯としてならば、又是程面白く是程高尚な又是程進歩的なものはあるまい。要するに俳諧は文学では無い。文学遊戯だとかう思つて余は之を楽しむ。がその樂が決して無益に成らず、他の文学的修養の上にわからぬ利益を得た事は、余の白状を躊躇せぬ所だ。（所々省略した）

秋声会派の連中、ほとんど皆こんな考え方であつたらう。俳句は遊びである。さすれば文学も遊びであらう。更に言えば芸術はすべて遊びである。芸術と遊び、遊びと人生、それは大問題であるだけに、小波はこの程度の立言で満足していた。「卯杖」誌上から俳論めくものを拾い集めても、当時の俳句界を覚醒させるような大理論は得られないであらう。思うにこの二つの句集は句集として決してすぐれたものではなかつた。それは秋声会派の俳句芸術に前進がなかつたことに関連している。した

がつてこの派に対立する子規以後の日本派の歩みがどうであつたかを考へることによつて、秋声会派の特色が一そう明らかにせられ、この句集の評価が定まってくるのである。しかしそれは次の機会をまつことにして、ここでは秋声会派の句集であるということだけから考へてみた。

（一九六二、六、一五）